田　村　19

―田村遺跡第 27 次調査の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1411集

2021

福岡市教育委員会

TA　　MURA

田　村　19

―田村遺跡第 27 次調査の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1411集

遺跡略号　ＴＭＲ－２７
調査番号　１８０９

2021

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では平安時代から鎌倉時代にかけての集落が発掘されました。集落内を貫通する大溝が検出され、灌漑と水上交通に用いていたと考えられます。大溝からは調査例が少なく、当時の生活を知る上で重要な護岸を目的とした水防工事や舟着き場とみられる雁木状の石段が検出されました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、多様な開発でやむなく消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

令和 3 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成 30 年度に田村公民館・老人いこいの家複合施設改築工事に伴い、福岡市早良区田村三丁目 757 番 1.755 番 1 地内で実施した田村遺跡第 27 次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は令達事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他、木下博文、板倉有大、中園将祥、藤野雅基、坂口剛毅が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は、荒牧、中尾祐太が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡　例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡を SB、竪穴住居跡を SC、土坑を SK、溝を SD、柱穴を SP、性格不明のものを SX とした。
4. 遺構番号は調査において全遺構に通し番号を付していき、本書では同じ遺構略号と番号を用いている。

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
1.　調査に至る経過 …… 1
2.　調査の組織 …… 1
3.　調査の経過 …… 1
4.　調査の方法 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 1
1.　田村遺跡の地形と周辺遺跡 …… 2
2.　野芥荘と既往調査 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 5
1.　概要 …… 5
2.　基本層序 …… 5
3.　溝（SD） …… 5
4.　掘立柱建物跡 …… 32
5.　土坑 …… 35
6.　鍛冶炉 …… 37
7.　井戸 …… 39
Ⅳ　おわりに …… 40
1.　時期と集落の変遷 …… 40
2.　SD15 について …… 40

挿図目次

Fig. 1　田村遺跡と周辺遺跡分布図（1/50.000） …… 3
Fig. 2　田村遺跡既往調査地点と第 27 次調査区（1/6,000、1/1,000） …… 4
Fig. 3　全体遺構配置図（1/200） …… 6
Fig. 4　SD15 土層断面図（1/50） …… 7
Fig. 5　SD15 護岸施設実測図（1/40・1/50） …… 8
Fig. 6　SD15 出土遺物実測図 1（白磁　1/3） …… 10
Fig. 7　SD15 出土遺物実測図 2（青磁　1/3） …… 11
Fig. 8　SD15 出土遺物実測図 3（陶器　1/3） …… 12
Fig. 9　SD15 出土遺物実測図 4（陶器　1/3） …… 13
Fig.10　SD15 出土遺物実測図 5（目跡が残る青磁 1/3） …… 14
Fig.11　SD15 出土遺物実測図 6（墨書土器・転用硯　1/3） …… 14
Fig.12　SD15 出土遺物実測図 7（合子・青白磁・白磁小椀　1/3） …… 15
Fig.13　SD15 出土遺物実測図 8（土師皿、瓦器小皿　1/3） …… 16
Fig.14　SD15 出土遺物実測図 9（土師器　坏 1/3） …… 17
Fig.15　SD15 出土遺物実測図 10（瓦器　椀 1/3） …… 18
Fig.16　SD15 出土遺物実測図 11（瓦器　椀 1/3） …… 19
Fig.17　SD15 出土遺物実測図 12（須恵質　捏鉢 1/3） …… 20
Fig.18　SD15 出土遺物実測図 13（土師質　捏鉢 1/3） …… 21
Fig.19　SD15 出土遺物実測図 14（土師質　器台、支脚　1/3） …… 21
Fig.20　SD15 出土遺物実測図 15（土師質　鍋 1/3） …… 22
Fig.21　SD15 出土遺物実測図 16（土師質　鍋 1/3） …… 23
Fig.22　SD15 出土遺物実測図 17（土師質　鍋 1/3） …… 24
Fig.23　SD15 出土遺物実測図 18（土師質　鍋 1/3） …… 25

Fig.19　SD15 出土遺物実測図 14（土師質　器台、支脚　1/3）…… 21
Fig.20　SD15 出土遺物実測図 15（土師質　鍋　1/3）…… 22
Fig.21　SD15 出土遺物実測図 16（土師質　鍋　1/3）…… 23
Fig.22　SD15 出土遺物実測図 17（土師質　鍋　1/3）…… 24
Fig.23　SD15 出土遺物実測図 18（土師質　鍋　1/3）…… 25
Fig.24　SD15 出土遺物実測図 19（土師質　鍋　1/3）…… 26
Fig.25　SD15 出土遺物実測図 20（石鍋　1/3）…… 26
Fig.26　SD15 出土遺物実測図 21（石鍋　1/3）…… 27
Fig.27　SD15 出土須恵器甕（1/3）…… 28
Fig.28　SD15（SX131）出土畿内系瓦器椀（1/3）…… 28
Fig.29　SD15 出土羽口、褐釉陶器水注（1/3）…… 28
Fig.30　検出面土層中出土阿高系土器（1/3）…… 28
Fig.31　SX126 実測図（1/40）…… 29
Fig.32　SX220 実測図（1/40）…… 30
Fig.33　SX130・131 実測図（1/40）…… 31
Fig.34　掘立柱建物平面実測図 1（1/50）…… 33
Fig.35　掘立柱建物平面実測図 2（1/50）…… 34
Fig.36　土坑実測図（1/40）…… 36
Fig.37　SK113・114 実測図（1/50）…… 37
Fig.38　鍛冶炉実測図（1/40）…… 37
Fig.39　SE221、SE115 実測図（1/20）…… 38
Fig.40　SE115 出土遺物実測図（1/3）…… 38
Fig.41　SE221 実測図（1/20）…… 39
Fig.42　SD15 護岸復元図 …… 40
Fig.43　第 5 次、27 次遺構配置図（1/1,000）…… 41
Fig.44　昭和 43 年周辺地形図（1/8,000）…… 42

カラー写真目次

ph. 1　SD15 護岸、水制施設検出状況（南から）…… 43
ph. 2　SD15 西岸護岸集石検出状況（南東から）…… 43
ph. 3　田村 27 次調査地点周辺 …… 44
ph. 4　東半部（2 区）検出状況（南から）…… 44
ph. 5　SD15 北端部護岸集石検出状況（南から）…… 44
ph. 6　SD15 西岸護岸集石（SX130、131 ～ SE221 付近）…… 44
ph. 7　SX126 検出状況（南東から）…… 44
ph. 8　SX220 検出状況（南西から）…… 44
ph. 9　SX130、131 検出状況（南西から）…… 44
ph.10　SX130、131 と下部の集石検出状況（南東から）…… 44
ph.11　SD15 西岸護岸列石（SX130、131 ～ SE221 付近）…… 45
ph.12　SX130、131 下部雁木状石列（南東から）…… 45
ph.13　SX130、131 下部雁木状石列（東から）…… 45
ph.14　SX130、131 下部雁木状石列（東から）…… 45
ph.15　SE115 桶井筒検出 …… 45
ph.16　SE127 上部（SX126 の集石が被る）…… 45
ph.17　SE127 裏込石検出 …… 45
ph.18　SE127 方形井戸枠，井筒（曲物）…… 45
ph.19　SE221 検出（上部に SD15 護岸集石が被る）…… 46
ph.20　SE221 井筒曲物検出 …… 46
ph.21　SD15 土層ベルト（鉄滓流入状況）…… 46
ph.22　鍛冶炉 SX251 検出状況 …… 46
ph.23　白磁合子 59（SD15 出土）…… 46
ph.24　褐釉陶器 24（SD15 出土 …… 46
ph.25　墨書土器 55（SD15 出土）…… 46
ph.26　須恵質甕 191（SD15 出土）…… 46
ph.27　転用硯 58（SD15 出土）…… 46

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市早良区田村三丁目757番1,755番1地内における田村公民館・老人いこいの家複合施設の整備改築工事に伴う埋蔵文化財の事前審査について福岡市市民局コミュニティ推進部コミュニティ施設整備課長から提出された依頼を平成29年9月27日付で受理した。これを受けて同日、文化財部埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田村遺跡に位置していることから遺跡確認のために確認調査が必要とする旨の回答を行った。確認調査は同年10月18日に実施し、地表面下20～50cmで遺構が確認されたことから遺構の保全等に関して関係部局と協議を行うことになった。その結果、埋蔵文化財への影響が工事区域の全域において回避できないことから、平成30年6月1日より調査を開始し、同年9月6日に終了した。

2．調査の組織

平成30年度の発掘調査、令和元年度の資料整理、令和2年度の報告書作成を以下の組織体制で行った。

【調査依頼】　福岡市市民局・福岡市保健福祉局

【調査主体】　福岡市教育委員会

【調査総括】　経済観光文化局　文化財部活用部埋蔵文化財課

課長　大庭康時（平成30年度）

課長　菅波正人（令和元年、2年度）

調査第2係長　大塚紀宜（平成30年度、令和元年）

調査第2係長　藏冨士　寛（令和2年度）

【庶務】　文化財活用課管理調整係　松原加奈枝（令和元年、2年度）

【事前審査】　埋蔵文化財課事前審査係

係長　本田浩二郎（平成30年度～令和2年度）

主任文化財主事　田上勇一郎（令和2年度）

文化財主事　吉田大輔（平成30年度）

松﨑友理（令和元年、2年度）

調査基本情報一覧

遺跡名	田村遺跡	**調査次数**	27次	**調査略号**	TMR－27
調査番号	1809	**分布地図幅番号**	84	**遺跡番号**	0317
申請地面積	1,040㎡	**調査対象面積**	1,040㎡	**調査面積**	858㎡
調査期間	平成30(2018)年6月1日～平成30年9月6日			**事前審査番号**	29－1－76
調査地	福岡市早良区田村三丁目757番、1,755番1				

３．調査の経過

工事期間との調整から西側の擁壁工事と調査が平行することになった。そのため、調査区中央を貫通するSD15より西側の調査(1区)を先行して終了させた。その後､擁壁工事に関わる範囲を受け渡し、SD15の調査と以東の調査(2区）を開始した。

調査区の南側は工事に伴い代替水路を構築した為、調査を行うことができない範囲が生じた。

４．調査の方法

条里方向に沿った敷地に合わせて任意のグリッドを設定した。およそ真北から7°30′西偏する。図面は周辺敷地と調査区を入れた1/100の平板図、1/20遺構全体図、個別遺構図、土層図を作成した。

Ⅱ　位置と環境

１．田村遺跡の地形と周辺遺跡

田村遺跡は早良平野をその営力で形成した室見川の右岸に位置する。周辺の沖積地には原遺跡、次郎丸遺跡、野芥遺跡、野芥大藪遺跡、四箇田遺跡など中世集落が営まれた遺跡が立地する。

埋没した旧流路や微高地には縄文早期の押型文土器や中期の阿高系土器が散発的に少量出土するが、多くは縄文後、晩期から弥生前期にかけての遺物や遺構が検出されている。弥生時代中期になると旧河川に堰や柵などの水利施設が構築されるようになる。地形が安定し、集落が広がり始めるのは古代以降とみられ、中世になり11世紀後半以降になると集落は広く展開していくようになる。

２．野芥荘と既往調査

「安元2(1176）年２月日の八条院領目録に｢筑前国野芥」と見え(山科古文書／平遺5060)、当荘が、鳥羽天皇第3皇女暐子(八条院）の所領であったことがわかる。養和元(1181）年のものとされる11月23日の紀俊守申上によると野芥荘は所当米709石で、その3分２は｢他所他庄之住人」が入作しているという。」(角川日本地名辞典）この皇室財政基盤となった王家領荘園の八条院領は12世紀後半以降になると継承した生母の美福門院領と合わせ拡大している。

田村遺跡のこれまでの調査成果を概観すると、概ね11と12世紀を境に立地を異にする。11世紀代では田村遺跡の南東側に位置する3次、4次、21次調査地点に中心がみられるが、12世紀から13世紀では西側の第2次、第5次調査地点に移り変わる。本調査地点も含め11世紀代の遺物はわずかに認められるが、12世紀代になり、遺物量、遺構ともに急激に多くなり、13世紀まで継続する。その後14世紀になり衰退がみられる。

本調査地点に隣接する第5次調査地点の SD100からは多くの中国輸入陶磁器とともに武蔵寺経塚の第8号経塚の外容器の片口鉢、第9号経塚外容器広口壷と同器形の東播系須恵器が出土している。

その背景には財力の豊かさや貿易のネットワークが見出され、八条院領のような荘園を想起させる。

【国土地理院発行5万分の1地形図（福岡）を使用】

1．田村遺跡	2．姪浜遺跡	3．西新町遺跡	4．藤崎遺跡
5．下山門敷町遺跡	6．有田遺跡	7．原遺跡	8．次郎丸・高石遺跡
9．免遺跡	10．野芥遺跡	11．戸切遺跡	12．羽根戸原C遺跡
13．吉武・高木遺跡	14．都地遺跡	15．四箇遺跡	16．重留遺跡
17．浦江遺跡	18．清末遺跡	19．安通遺跡	20．東入部遺跡

Fig.1　田村遺跡と周辺遺跡分布図（1/50,000）

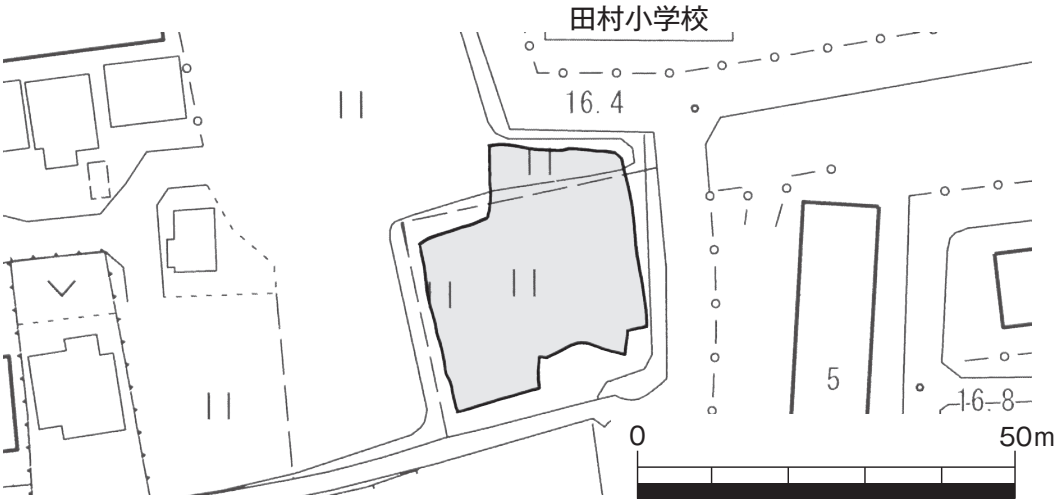


Fig.2　田村遺跡既往調査地点と第 27 次調査区（1/6,000、1/1,000）

Ⅲ．調査の記録

１．概要

第5次調査で検出された中世集落の延長部分である。今回の調査では11世紀後半～14世紀初頭までの集落遺構が考えられるが、活動の中心となった時期は12、13世紀代である。検出された主な遺構のなかで灌漑と水運に利用したと考えられる大溝（SD15）、それに付随した護岸施設の「杙」と集石、水流調整施設の「だし」2か所（SX126、SX131）、舟着場の可能性がある雁木状の石段（SX130、SX131）が特筆される。SD15内からは護岸の集石に混じって多量の遺物が出土した。その中には宋代中国陶磁器も多く、畿内系の瓦器や土鍋も含まれる。近くに皇室領である「野芥荘」の遺称地が在り、関連が注目される。

２．基本層序

水田耕作土が約40cm堆積し、以下、灰色粘質土が約8cm、酸化鉄集積層が2cmの層序で、その下層に遺構検出面の淡黄褐色土となる。SD15の掘削によって、この検出面となった淡黄褐色土は約50cm堆積し、縄文中期の阿高系土器の底部203が出土した。さらに下層の標高14.6m付近では礫層となる。遺構検出面の標高は調査区北東部で15.6m、北西部15.3m、南東部15.6m、南西部15.4mを測り、北西方向に僅かに傾斜している。

３．溝（SD）

SD15・16（Fig.3～5、Ph.1～3）

調査区のほぼ中央部を南北の条里方向に則した N-13°-W方向で貫通する大溝である。5次調査で検出された SD100の延長となる。北側の8、11次のトレンチ調査で検出された溝が延長とみられるが、直線的に接続せず、東に振れることから、蛇行していることが推測される。SE127や SE221の上部に護岸施設の集石が検出されたことから、集落形成後に期間をおいて掘削されたものと判断される。

西側へやや湾曲しながら幅6.1m前後、深さ80cmを測る。北端の調査区壁面から上部の掘り込みが観察され、幅7.8m、深さ110cmが測定できる。底面のレベルは調査区南端で標高14.4m、北端で標高14.3mを測り比高差は無い。

当初、北側部分の検出において内部に岸のラインと平行する土層の違いが明瞭に判別できたことから、掘り直しの可能性を考慮して、切っていると考えられた西側の部分を SD15、残りの範囲を SD16として区別した。しかし、その後の発掘や土層断面の観察によって、下層までの掘削は認められず、埋没していく過程で浅く溝状に残った土層であることが確認された。従って、以下の説明では SD15単一の水路として説明する。

土層は上層に酸化鉄が班紋状に入る灰褐色粘質土が堆積し、以下グライ化が強くなり、上面から40cm下から底面までの層厚40～60cmにかけてうねった砂層を含む砂質土ないしシルト、砂層が互層となって堆積していた。底面は砂礫となり、巻き上げられた底面と地山の砂礫との区別が見極めにくい。概ね、遺物が出土しなくなるところで下底とした。

護岸施設（Fig.5、ph.１、２、５、６）

北端から SX130付近までの西岸の下端に沿って人頭大の石が1列に配されていた。その石列上部から西岸側壁までには小石が多量に充填されていた。土層ベルトより南側ではこの石列の延長は流失しているが、SX130・131周辺から SE221にかけては下端より少し高くなった側壁に断続的に人頭大に近い石列が検出され、この石列上部から下底にかけて拳大以下の小石が土器などの遺物とともに多量に

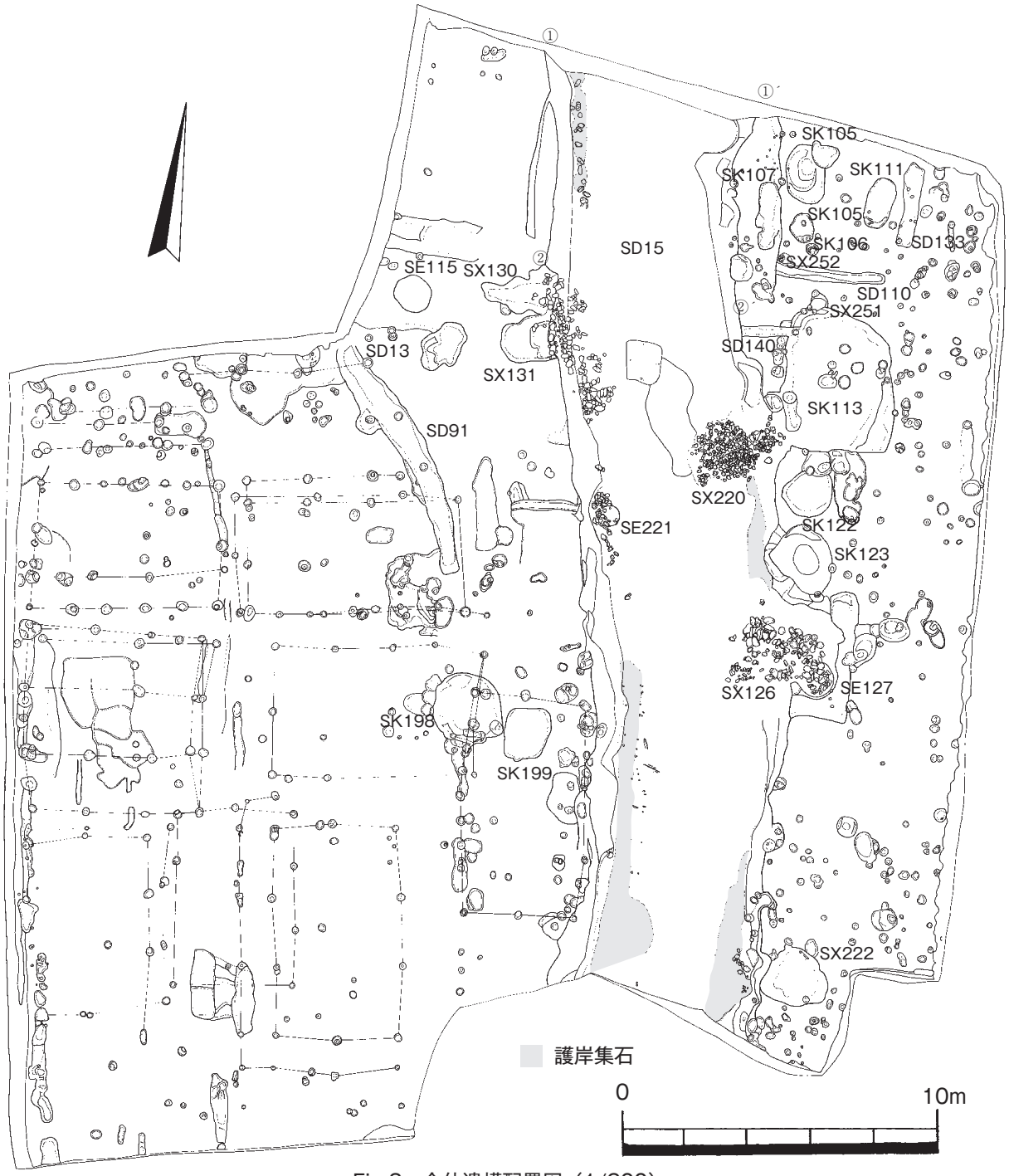
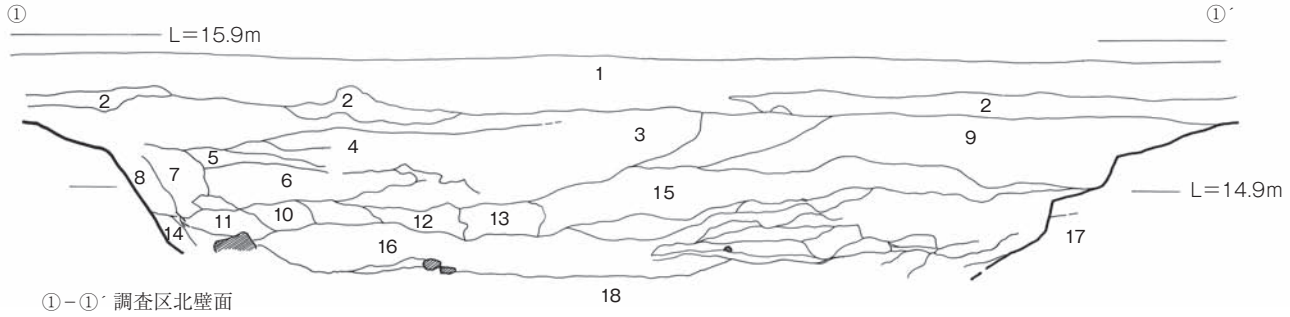
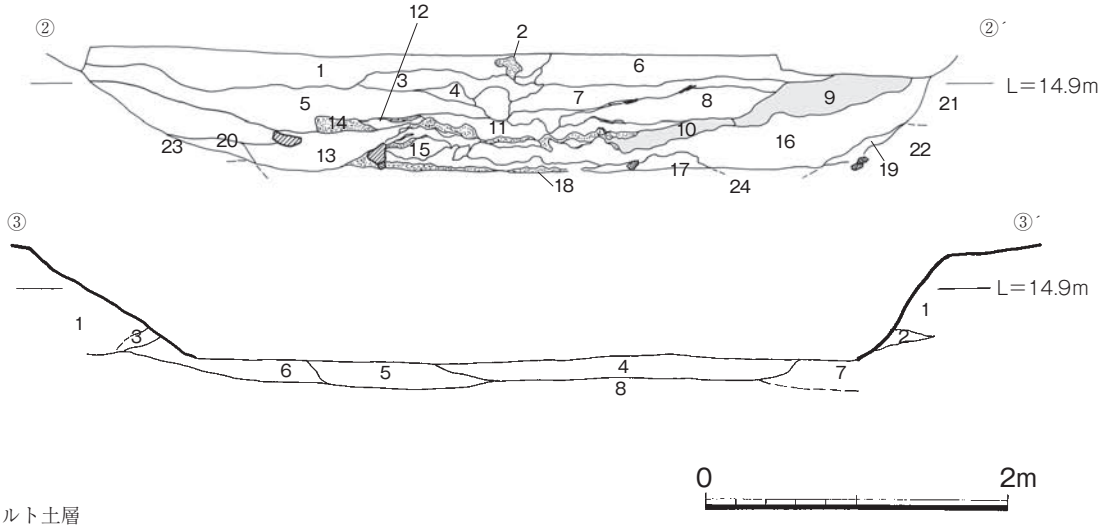


Fig.3　全体遺構配置図（1/200）



①－①´ 調査区北壁面

1. 耕作土
2. クラッシャー(擁壁埋土)
3. 灰色砂質土
4～8. 暗灰褐色粘土～灰色粗砂
9. 灰褐色粘土
10～14. 暗灰褐色粘土と灰色粗砂の互層、12～14層は遺物を多く含む
15. 暗灰褐色粘土
16. 黒灰色～暗青灰粘土
17. シルト層
18. 礫層



②－②´ ベルト土層

1. 灰色シルト
2. 灰色粗砂ブロック
3. 暗灰色シルト
4. 暗灰色粘質土
5. 暗～黒灰色粘質土
6. 灰色粘質土(酸化鉄の斑紋含む)
7. 暗灰色粘質土
8. 灰色シルト
9. 焼土, スラッグ
10. 焼土, スラッグ混灰色粗砂
11. 黒色粘土
12. 暗灰色砂混じり粘質土
13. 暗青灰シルト
14. 灰色粗砂
15. 黒灰シルト
16. 暗青灰色粘質土
16. 暗青灰シルト
17. 拳大の礫混じり灰色砂, シルト
18. 灰色粗砂～シルト
19. 暗青灰シルト
20. 拳大の礫混じり暗灰色粘質土
21. 明黄色粘土
22. 酸化鉄, 礫層
23. 青灰シルト
24. 砂礫層

③－③´ ベルト土層下底

1. 明黄色粘土
2. 灰色シルト
3. 黒灰細砂
4. 灰色粗砂
5. 拳大礫
6. 灰色細砂
7. 拳大礫層
8. 礫層

Fig.4　SD15 土層断面図（1/50）

分布していた。さらに下端付近では小杭が間隔をおいて下端のラインに沿って配列し、その間に粗朶が同方向に延びていた。このことから下端に沿って両脇に大きめの石列や杭に枝木を絡ませた「枠」を構築し、その内部に小石を充填し護岸したものと考えられる(Fig.42)。この工法は近世の「続枠」（算法地方大成）へと発展したものであろう。この護岸施設には洪水による損壊も多く、流入や廃棄による土器類が損壊、流出した小石とともに多量に洗い出され出土したものと考えられる。

東岸では充填した小石と思われるものがSX126からSX220にかけて部分的に検出されたが、多くは流失したものとみられる。流路の弯曲や岸の立ち上がり角度から東岸は攻撃斜面となっていたとみられる。

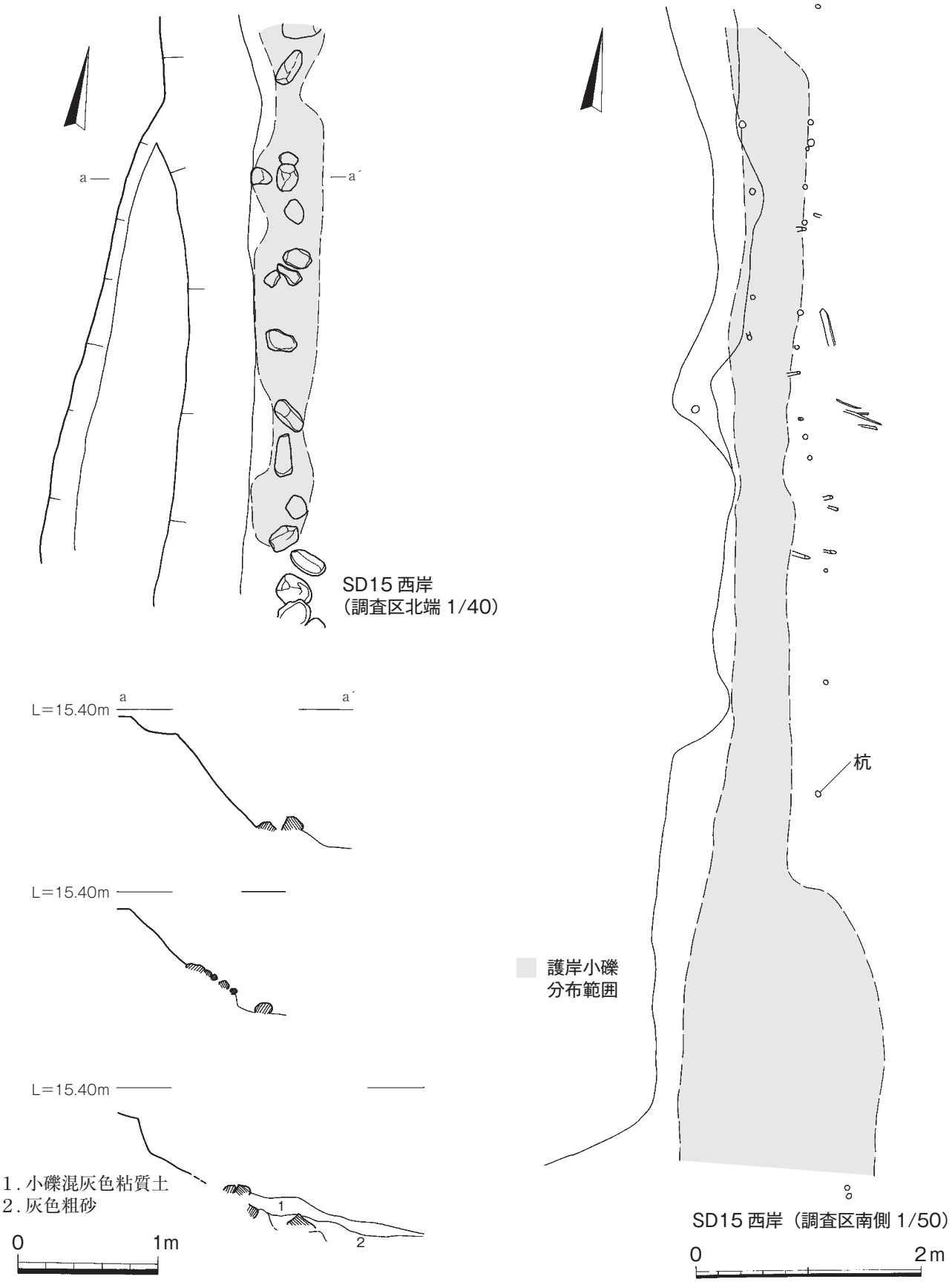


Fig.5　SD15 護岸施設実測図（1/40・1/50）

出土遺物

白磁(Fig.6)

１は皿Ⅳ-2a類、2は皿Ⅳ-1a類、3は皿Ⅵ-1a類、4は皿Ⅲ-1類、5はⅡ-1a類、6は皿Ⅷ-1´類、7は皿Ⅷ-2b類、8は皿Ⅷ-1b類、9は口禿口縁である。皿Ⅸ-1c類に高台が付いた器形を呈す。10は皿Ⅸ-1c類、11、12は小椀ⅩⅣ-b類、13は小さい玉縁口縁で体部は弯曲する。鉢Ⅱ-2類に近い。14は椀Ⅴ-4b類、15は椀Ⅴ-1a類、16は椀Ⅷ-3類、17は椀Ⅳ-1a類である。11世紀後半から14世紀前半までに出土する白磁類とみられ、９、10が最も新しい時期と考えられる。

青磁(Fig.7)

18、19は同安窯系皿Ⅰ-1a類、20はⅠ-2a類で外底にヘラ記号を有す。21は同安窯系皿1-2b類、22は口径10.6cmの直口を呈した小椀である。23は5ヶ所に輪花を有す龍泉窯系小椀である。24は龍泉窯系小椀Ⅱ-b類、25は鉢に近い器形を呈し、体部下半は露胎である。口縁部内面を玉縁状に肥厚させている。26は龍泉窯系椀Ⅰ-2a´類、27は龍泉窯系椀Ⅰ-4a、28は未分類である。外面の高台から底部にかけて露胎である。口縁端部が短く外反する。29は龍泉窯系椀Ⅱ-b類、30は龍泉窯系椀Ⅱ-a類、31は未分類である。先端が丸い連弁の中に櫛目を入れる。口縁は直口である。外底中心がわずかに突出する。外面高台から底部にかけて露胎である。32は龍泉窯系椀Ⅰ-1c類、33は内面見込みに4ヶ所粘土目跡を有す。34は未分類の同安窯系椀である。外面に縦の櫛歯文、内面の体部上位と中位に2条の沈線、下位に櫛歯の列点文を施す。35は同安窯系椀Ⅰ-1b類である。

連弁文の29、30は13世紀代まで降ると考えられ、未分類の28、31、34の時期は不明ながらさらに降る可能性もある。

陶器(Fig.8、9)

36は無釉であるが、内面に薄く灰釉がかかる。37、38は同一個体と思われる壷Ⅰ-1類、39、40は同一個体で耳壷Ⅵ-2類である。外面上位に横位と斜位の沈線が2条施され、外底や高台畳付に粘土が付着したまま残る。41、42も耳壷Ⅵ類である。43、44は褐釉の水注Ⅱ類である。口縁部上面と内面の8ヶ所に粘土の目跡が付く。45は褐釉陶器の鉢3類、46は褐釉陶器の盤Ⅱ-1a類、47は無釉の鉢Ⅰ-1b類、48は褐釉陶器の鉢Ⅱ類である。

49、50は褐釉連弧文壷で耳に獣面状のレリーフがある。51は黄褐釉鉄絵花文の盤Ⅲ-b類である。口縁部に釉溜りができ、T字状となる。52は黄褐釉鉄絵花文の盤で、器形からは未分類である。

その他の青磁(Fig.10)

53は見込みに4ヶ所粘土の目跡が付く。33と同器形であろう。54は高麗青磁椀Ⅲ類である。釉下に化粧土が無いため、白色粒子が斑点状となっている。

墨書土器など(Fig.11)

55は白磁椀Ⅷ類の外底部に「献(？) 上(？)」、56は白磁椀Ⅴ-4b類の外底部に花押(？) が書かれている。57の灰釉壷はⅣ類に含まれ、外底部に墨書を有す。58は平瓦を転用した硯である。背面に擬格子のタタキ痕が残る。

白磁・青白磁(Fig.12)

59は白磁の香炉もしくは合子とみられる。内面に5弁の花と蔓状のレリーフが貼り付けられている。60は白磁の合子受部である。61は青白磁の合子蓋である。62は青磁見込みのスタンプ文が剥落したものと思われる。63は菊文が型押しされた青白磁の小皿である。64は白磁小皿、65は角錐形を呈した白磁鉢皿である。